

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2018年11月1日発行(毎月一回発行) 第731号

ISSN 0286-7001

# 本の ひろば

11 NOVEMBER  
2018

## 出会い・人

『このあと どうしちゃおう』で どうしちゃおう  
鈴木 光

## 本・批評と紹介

A.E.マクグラス 著／本多峰子 訳  
旧約新約聖書ガイド 山本芳久

日本キリスト教文化協会 編  
宗教改革の現代的意義 出村 彰

アレクサンドリアのクレメンス 著／秋山 学 訳  
キリスト教教父著作集4—II  
アレクサンドリアのクレメンス ストロマテイス(綴織)II  
阿部仲麻呂

日本キリスト教団出版局 編  
説教黙想 アレタイア  
ローマの信徒への手紙 柳谷知之

福嶋 揚 著  
カール・バルト 佐々木 潤

菊地 譲 著  
続 この器では受け切れなくて 鈴木正三  
アジア・カルヴァン学会日本支部／日本カルヴァン研究会学会誌  
カルヴァン研究——特集「ものとするし」  
関川泰寛

柴崎 聰 著  
詩集 香りの舟 中村不二夫

松谷好明 著  
キリスト者への問い 富永憲司

澤 正幸 著  
長老制とは何か 深谷松男

土井健司、久松英二、村上みか、芦名定道、落合建仁 著  
1冊でわかるキリスト教史  
—古代から現代まで 阿部善彦

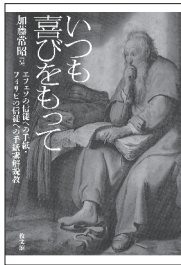
吉田 実 著  
絵画と御言葉 町田俊之

近刊情報

書店案内



伝道し、  
教会を造り上げる言葉



**いつも喜びをもつて**  
加藤常昭編  
加藤常昭氏と共に説教塾で研鑽を重ねてきた牧師らよる講解説教集。  
使徒パウロが記した獄中書簡から、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、  
深さを説き明かす。

● 四六判・416頁・本体2,200円

豪華9枚組コンプリートDVD BOX +  
公式スペシャルガイドブック  
公式ガイドブックには、全26話あらずじと聖書の解  
説コラム、関係者しか知らないアニメ製作の秘話や、  
漫画家・里中満智子さんのインタビューも収録！

● 本体28,500円



天地創造からイエスの誕生  
まで、壮大な聖書の世界を  
描いた全26話。世界が絶賛  
した聖書アニメの最高峰  
が、手塚治虫生誕90周年  
を記念して待望の復活！

巨匠・手塚の遺作アニメ In The Beginning

# 手塚治虫の旧約聖書物語

## C・S・ルイスの読み方

物語で真実を伝える

A・E・マクグラス 佐柳文男訳

『ナルニア国物語』で多くのファンを得たルイス。無神論者だった  
彼が信仰へと接近する心の軌跡と、豊かな作品世界。友情、  
愛、希望などのテーマから、生きることに信じることにの本質につ  
いて語りあう。

● 四六判・248頁・本体2,300円

## 憧れと歓びの人 C・S・ルイスの生涯

A・E・マクグラス 佐柳文男訳

神の再発見、トールキンとの友情、妻を  
得た喜びと死との対峙……。現代を代  
表する神学者が克明に描きだす、深い  
思索と信仰に貫かれた生涯。

● A5判・556頁・本体4,900円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL.03-3561-5549(出版部)  
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyokunkwan.com/>

shop 教文館



## 出合い・本・人

『このあと どうしちやおう』で どうしちやおう——鈴木 光

六歳になったばかりの娘がいます。本が大好きで、図書館や本屋さんに行くとき、いつまで経っても帰ろうとしません。最初は絵本、最近は児童書も喜んで読んでいます。私も昔から本好きでしたから、本当に親子は似るところがあるのだなと身をもって感じています。

さて、一年ほど前に娘がとても興味を持った絵本がありました。人気の絵本作家であるヨシタケシンスケさんの『このあと どうしちやおう』（ブロンズ新社、二〇一六）です。この方は本はどれもとても楽しく、私も大好きなのですが『このあと どうしちやおう』だけは、牧師家庭の教育上、どうしちやおうと悩みました。それは、この絵本の描く死後の世界観が聖書的なものとはだいぶ違ったからです。

絵本の内容は、ある男の子のおじいちゃんが亡くなり、そのおじいちゃんの残した「このあと どうしちやおう」と書かれたノートを発見することから始まります。そのノートにはおじいちゃんが想像した死後の世界が、ユーモアたっぷりに描かれているのです。男の子はその内容を楽しみ、おじいちゃんのお持ちを考え、自分でも死後の世界について考え始めます。人間の成長の過程で、向き合う事がとても大切なテーマを扱った、素晴らしい内容です。しかし、その死後のイメージが聖書の世界観とは違い、神様がたくさんでてきますし、生まれ変わら

すし、この世と似たようなあの世が描かれています。

聖書の死生観を伝える前に、このイメージが娘に定着してしまうのもどうだろうと悩み、しばらく「これは買いません」と言っていたのですが。そういうのに限って幼い娘は執着するようで、親の目を盗んでは本屋でこっそり読むのです。

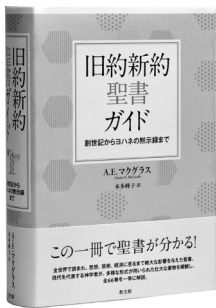
ある日、作者のヨシタケシンスケさんが、ご自身がご家族の死を経験し、なかなか話題にできない死の問題を、もつと気軽に話し合っていくことが良いのではないかと考えて、この本を書かれたことを知りました。また、読者にもそれぞれの「このあと どうしちやおう」ノートを書いてみてはと、勧めていることも知りました。

そこで、娘には「わかった。この本を買おう。そのかわり、パパが信じている『このあと どうしちやおう』ノートを作るから、それもよく読んでね」と言って購入しました。その晩、娘に説明しながらノートを作りました。親子にとって大切なことを話し合う、得難い時間となりました。とても嬉しいことでした。ただ一つ残念なのは、わたしの下手な絵で描いたノートは、その後は読んでもらっていない様子がないことです。このあと、どうしちやおう。

（すずき・ひかり 日本基督教団勝田教会主任牧師）

聖書に親しむための最良の伴侶  
A・E・マクグラス著  
本多峰子訳

## 旧約新約聖書ガイド 創世記からヨハネの黙示録まで



山本芳久

『旧約新約聖書ガイド——創世記からヨハネの黙示録まで』の著者であるアリストター・マクグラスは、『キリスト教神学入門』（教文館、二〇〇二年）、『総説キリスト教——はじめての人のためのキリスト教ガイド』（キリスト新聞社、二〇〇八年）といったキリスト教神学に関する本格的で体系的な入門書を多数執筆している、現代世界を代表する神学者の一人である。

マクグラスの精力的な活動の一端に、評者も直接触れたことがある。それは、「毒か癒やしか？ 現代世界における宗教的信仰」という二〇〇七年にジョージタウン大学において開催されたクリストファー・ヒッチンスとの討論会においてであった。ヒッチンスは、生物学者であるリチャード・ドーキンスと並ぶ戦闘的な無神論者として知られ、『神は偉大ではない——宗教はいかにして全てを毒するか』（二〇〇七年）というベストセラーを刊行したばかりであった。自らの無神論的な見解を一本調子に述べ立てるヒッチンスに対して、キリスト教思想史の全体を熟知したところから生まれてくる多面的でバランスの取れた応答をするマクグラスの平衡感覚から、極めて強い印象を受

けた。

『旧約新約聖書ガイド』においてもまた、マクグラスの平衡感覚が遺憾なく発揮されている。周知のように、現代の聖書学は極めて専門分化の激しい分野となっている。「聖書学者」と呼ばれていても、聖書の全体ではなく、旧約聖書または新約聖書のなかに含まれるごく一部の文書の専門家であるのが通例である。専門としている文書については詳しい註解を書くことができても、それ以外の部分については沈黙する、または通り一遍の説明に終始してしまうというのが通例となっている。

それに対して、マクグラスの『旧約新約聖書ガイド』においては、旧約新約聖書に含まれる六六の文書のすべてにわたって、ほどよく掘り下げた註解がほどこされている。

この、「ほどよく掘り下げた」というところにこそ、本書の存在意義がある。聖書を手取る人の多くは、独力で読み解いていくことの限界に直面するが、註釈書を手取ってみると、あまりに詳細であったり専門的であったりして役に立てにくいという問題に直面する。だからといって、より簡単なような概説

書を手にとると、今度はあまりにも大雑把すぎて、聖書の一節一節の確かな理解には資さないことが多い。

それに対して、『旧約新約聖書ガイド』においては、聖書の全体に通じており、体系的な概説書を書き慣れているマクグラスが、聖書全巻についての一貫した理解に基づいて、旧約聖書冒頭の「創世記」から新約聖書末尾の「黙示録」に至るまで丁寧な註釈を順序立てて加えているため、聖書の全体についての類のない概説書として、聖書やキリスト教に関心のある全ての人にお薦めできるものとなっている。

マクグラスの聖書理解は、特定の教派の色に染まっていない極めて穏当なものである。「穏当」と言うと、迫力のないイメージを与えるかもしれないが、我々が本書において出会うのは、キリスト教思想全体についての体系的な理解に基づいているからこそ発せられる凝縮された洞察の連鎖である。たとえば、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であつ

た」という言葉で始まる有名な「ヨハネ福音書」の序文の註解

は、「イエスが神を知らせるのは、イエス自身が神だからである」と極めて簡潔でありつつ本質を射抜いた言葉によって結ばれている。

『旧約新約聖書ガイド』は、大部の著作であるが、極めて読みやすく、また、読者の関心に応じて、どこからでも読み始めることができる。このような稀有な聖書概説書が、本多峰子氏によるこなれた日本語で翻訳刊行されたことによって、聖書について、そしてキリスト教の教えについてのバランスの取れた理解を獲得するための最良の入口が与えられたことを祝しつつ擲筆したい。

（やまもと・よしひさ＝東京大学准教授）

（A5判・七三四頁・本体七二〇〇円＋税・教文館）



教文館の本

http://shop-kyobunkwan.com/

重版出来！



A・E・マクグラス 本多峰子訳 ● A5判・734頁・本体7,200円

## 旧約新約聖書ガイド

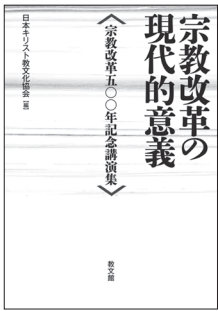
創世記からヨハネの黙示録まで

聖書の言葉に生きる神学者による聖書の手引きである。優れた、豊かな、そして確かな一冊である。深井智朗氏（東洋英和女学院院長）推薦！

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1  
TEL 03-3561-5549  
呈 / 内容見本、図書目録 ● 価格は税別

宗教改革の原点と現代を結ぶ絶好の良書  
日本キリスト教文化協会編

### 宗教改革の現代的意義 宗教改革五〇〇年記念講演集



出村 彰

またしても、五〇〇年を記念するのに絶好な良書が加えられたことに感謝のほかない。そもそも、四〇〇年記念のハンス・フォン・シューベルト『宗教改革の世界史的意義』（邦訳は石原謙、一九三一年）、戦後間もない『マルティン・ルター』（熊野義孝、一九四七年）、神学生時代の『宗教改革の神学』（北森嘉蔵、一九六〇年）、さらに後には、ペイントン史学、と触れ続けてきて今がある評者の世代にとって、本書もその好個の事例であるような宗教改革への視野の拡がり、考究の深まりに、ただ驚きあるのみである。「あとがき」によれば、昨年六月、連日開かれた公開講演会の内容の集大成の由、上記のような評者の感慨を裏証するに十分である。

全体は大きく三部に分かたれる。「ルターの生涯と思想」、「宗教改革と芸術」、および「宗教改革と現代」である。勝手な言い直しになるかもしれないが、まずはルターの信仰内容の神学的考察、次いで、人間の美的感性への波及の論述、最後に、時系列の中で生きるほかないわれわれにとって、宗教改革の遺産継承の問題、とでもなるうか。勝手な読みようではないと

——似非ピュリタニズムだろうか、「評」などの資格は皆無である。しかも、「霊も魂も体も」全からんことを祈った使徒パウロの言葉に徴しても、教えられるところ多大である。

第三部は、本書の題名にもっとも近い「宗教改革と現代」である。前半の「ルターの戦争観と現代」では、執筆者野々瀬浩司氏が前任校（防衛大学校）での体験にも事寄せつつ、人類史を一貫する「戦争と抗争」の問題をキリスト教史から論説する。絶対非戦、対蹠的な聖戦、あるいは義戦、普遍性を持つ正戦——他人ごとでは済まされない現代の課題である。最終章は、前東京神学大学学長近藤勝彦氏による「世界史の中の宗教改革」となる。宗教改革とは、一六世紀を挟んで数百年にもわたって西欧を中心とした歴史的転向点であると同時に、いつでもどこでも問われるべき共通の価値として「自由」を希求する旅である所以が説かれる。永遠課題としての宗教改革とでもなるうか。

この一兩年だけでも、広い意味で宗教改革を主題とする刊行

しても、結果的には縦糸と横糸の織りなす見事な構成となった。「ルターの生涯と宗教改革」による導入を担当する小田部進一氏は、一昨年刊行の『ルターから今を考える』（日本キリスト教団出版局）によってルター神学の新しい切り口を裏証したが、今回も大きな期待に背かない。対して、すでにベテランのルター研究者江口再起氏は、「恩寵義認——ルター神学の核心」によって、「善行はなくとも、せめて信仰によって」と、信仰さえもおのれの義の拠り所とする危険を鋭く指摘する。

第二部は、端的に信仰、さらに広くは宗教と感性（視覚や聴覚など）の関わりを問い直そうとする。「宗教改革と美術——イメーজの力」の論者遠山公二氏、「ルターの音楽観とその受容——ヨーハン・ゼバスチアン・バッハまで」の論者佐藤望氏の両氏は、紹介によって「きわめ」付きの研究者、また演奏者であることを承知させていただけだ。残念ながら、すべて感性的なものには極度に消極的な改革派の流れに属する評者には（私事ながら、亡父の世代のときには、讚美歌が下手なほど福音的であり、どれでも同じ曲で歌えるのが理想だったとか

物は、文字どおり「汗牛充棟もたならぬ」数だろう。評者もいくつかの書評（『宗教改革と現代』、『旅する教会』など）の依頼に応じたが、若手執筆者の輩出にはただ驚きを禁じえない。それでも率直に言って、評者として本当に知りたいのは、去年の「あの」記念日に世界各地で、ことにヴッテンベルクで、あるいは長崎浦上天主堂で開かれた、カトリックとプロテスタントとの「合同礼拝」がどのように進められたのか、中でもミサ聖祭と聖餐式とはどうだったのだろうか、である。神学論は尽くされ、互いにも譲れない論点もほぼ明らかとなった。残るのは、この時点までも得られた合意点、礼拝・牧会・伝道の現場で、信徒層を巻き込んでどう活かされるうのかではないだろうか。ただの「ないものねだり」ではなく、期待するところ多大である。

（むら・あきらら＝東北学院大学名誉教授）  
（A5判・一八四頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

八木重吉の詩と静謐な写真  
とが響きあう珠玉の詩集



八木重吉 信仰詩集  
おちあいまちこ 写真  
八木重吉の詩は素朴で力強い。信仰詩を中心に72編を精選し、静謐な写真を添える。歌手の沢知恵氏による解説付き。  
A5判変型・80頁・1296円



エレミヤの言葉を現代に甦らせる

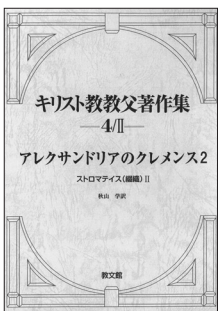


エレミヤ書を読もう  
悲嘆からのちへ  
左近 豊  
祖国ユダ王国の崩壊期に民と悲しみを共にし、未来の希望を指し示した預言者エレミヤ。その言葉をこの暗い時代にこそ聴き直す。  
四六判・136頁・1512円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 03-3204-0457  
E-mail eigyou@bp.ucci.or.jp 《価格8%税込》  
http://bp-ucci.jp

真の信仰者の姿勢を問い、明示した教父の主宰  
アレクサンドリアのクレメンシス著  
秋山 学訳

キリスト教教父著作集 4—II  
アレクサンドリアのクレメンシス  
ストロマテイス（綴織）II



阿部仲麻呂

このたびアレクサンドリアの聖クレメンシス（一五〇頃—二一五年以前）による『ストロマテイス』が完訳された。まさに稀有な翻訳であり、慶事である。聖クレメンシスと言えば、古代のギリシア教父として著名である。キリスト教の教会共同体において、ギリシア語でキリスト教神学に関する著作を遺した文筆家が「ギリシア教父」と呼ばれている。しかしギリシア教父は単なる文筆家に留まらない。むしろ活ける信仰者として信徒たちを愛情深く導いた牧者であった。相手を支えて神と出会わせる霊的指導の熟達者が「牧者」と呼ばれている。

本書は『ストロマテイス』の後半部である。つまり、クレメンシスによる信仰論の第五巻から第八巻までの記録の邦訳である。前半部（既刊）では、キリスト者の信仰生活の基本事項（哲学と信仰との関係、信仰と善行、婚姻、殉教者と完全な覚知の域への到達者）を明確に論述している。後半部では、「真なる覚知」とは何かを集中的に述べている。こうしてクレメンシスが「真なる覚知」に到達するための前提（第一巻から第四巻）と道行き（第五巻から第八巻）とを読者に指南していることが理

解できる。ということは、クレメンシスが『ストロマテイス』の論述をとおして、哲学を準備段階として信仰の領域へと読者の人生の視点を深めることを目指していることが看取される。

特に第七巻が重要である。「覚知者」（グノステイコス）は真の敬虔さを身につける。敬虔さとは神への敬意と信頼を表明して愛情に満ちた行いを現世で貫徹させる信仰者の姿勢である。この姿勢は古代から近代に至るキリスト者の生き方の核心として常に再確認されつつ堅持される。二世紀から四世紀に、物事の真相を認識することを閉鎖的に独占したエリート集団によるグノーシス主義思潮がはびこり、庶民層の人的尊厳や可能性が軽視される状況が存した。その暴挙と徹底的に対峙し、万人のいのちの尊さと現実生活とを守り抜いたキリスト者にとって敬虔さが独自の旗印となった。その端緒をクレメンシスが開いた。真の知者は閉鎖的なエリート主義に陥らず、人々に奉仕して全体を豊かに富ます共存共栄の道を実現する温情を備える。

ところで「ストロマテイス」とは「綴織」という意味をもつ。つまり「絨毯」のような一枚の布を連想させる。今日の私

たちでさえも、居室に絨毯を敷けば、空間がたちまち高級化され、すかさず特別な居場所が創り出されるように実感する。ということとは『ストロマテイス』を世に問うことによって、クレメンシスが信仰者ひとりひとりの心の奥底に神の居場所をしつらえるための方法論を書き遺したことが容易に理解できる。しかも、「綴織」から連想されるように、クレメンシスがかなりの時間をかけて丹念に古代ギリシア文化のさまざまな分野の智慧を集約した格言を精査しつつも美しい模様となるように巧みに調和させ、壮麗なる一大絵巻を完成させたとも言える。

クレメンシスは古代ギリシア文化の諸学問や哲学の素養を備えつつもキリスト者としての信仰の立場を、死をも怖れぬ決然たる覚悟をもって選び取った。彼の旅路は、その後の西欧文化の模範となつたばかりか、今日の私たちの東アジア圏域における信仰者の歩みの拠りどころともなる。なぜならば、あらゆる地域の人間たちは、自分たちの生きている地平における思考法や生活習慣を決して捨象することができないからである。誰もが自分の生存空間の枠組みのなかに土着するかたちで、しかも高邁なる信仰者としての志を保たねばならないのだから。その意味で、人類は土着しつつも普遍的に上昇するという洗練された

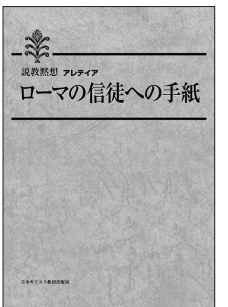
生き方を目指さねばならない。

私事を書く。こう。三〇年前、古代から中世にかけての西欧哲学を専門的に学んだ際に『ストロマテイス』という著書名が妙に印象に残った。この書名を心のなかで唱えるたびに自分が高尚な人間になつたかのように錯覚し、いつかは重点的に研究したいと念願した。こうして幾度か原典を参照しつつ内容をつかみ取るべく格闘したが、さまざまな古典文献の精華を凝縮した文体には歯が立たずに難儀した。ところが、畏敬する秋山学先生が見事な全訳を完成させた。深く感謝したい。秋山先生は西洋古典学の大家であり『教父と古典解釈——予型論の射程』創文社、二〇〇一年）、キリスト教神学の核心にも通暁し『ハンガリーのギリシア・カトリック教会——伝承と展望』創文社、二〇一〇年）、研究者としての冷徹な客観性のみならず礼拝や瞑想の奥義をも体得たうえでの独自の思索を展開する『律から密へ——晩年の慈雲尊者』春秋社、二〇一八年）。しかも誠実な教育者でもある。クレメンシスの生き方そのものが秋山先生の生き方に響き合つて顕在化する。

（あべ・なまこ 日本カトリック神学会理事）  
（A5判・五二二頁・本体八三〇円＋税・教文館）

説教者をさらなる深い学びへと招く釈義・黙想集  
日本キリスト教団出版局編

## 説教黙想 アレテイア ローマの信徒への手紙



柳谷知之

『説教黙想 アレテイア』にて二〇一四年から二〇一五年に連載されたローマの信徒への手紙（ローマ書）の釈義・黙想集である。執筆陣は十五名で、日本福音ルーテル教会や日本基督教団、イムマヌエル綜合伝道団、カトリックなどバラエティに富んでいて興味深い。

冒頭の序論は、説教者なら誰でも抱くであろう思いが投影されている。ここに、ローマ書の持つ歴史的意義や、パウロの状況などローマ書を紐解くにあたっての概観がある。著者は、自然神学や同性愛、契約遵法主義など賛否のある議論においても大切なことは「誰かを安易に切り捨ててしまわないように」注意を促し、語り慣れたこと、聞き慣れたことにおいても、それに安住せず繰り返し新たにテキストに聴くことを促している。そして、信仰義認とはそもそも「正しきはわが陣営」という態度をゆるさない教理である、と断言する。この姿勢に共感し、本書を隅々まで読み、対話し、時には参考にししながら、批判を交えながら学ぶことができるかと確信した。

個々の聖書箇所の記事に入っていくと、どの記述も日本語で

手に入る注解書を参考にしていることは喜ばしく、説教者にとって学びをさらに深めたい意欲へとかきたてる。

個人的には、まずローマ書が時代の転換期において重要視され、読み直されたことに関心を持つ。特に、三章二―二六節と三章一―七節をどう読むかに興味があった。

前者は、ルターがパウロを通して「信仰義認」を再発見し、宗教改革に向かう礎を与えた箇所として知られる。当時の教会が、教会の伝統や行いを重視していたことに対して、ルターはイエス・キリストに対する信仰こそ大切なことであると主張し、恵みによって義とされるのが、彼自身をも大いに慰め勇気づけたことは大変重要な意義がある。しかし、一方でこの信仰が主観的な信念のようにとらえられがちであり、二二節の「ディア・ピステオウス・イエス・クリストウス」の属格をどのように訳すかについて、様々な議論があることも知られている。すなわち、「キリスト・イエスに対する信仰によって」と目的語的に解釈されてきたことに対して、「キリスト・イエスの信実（忠実さ）ゆえに」と、主語的属格的に解釈するのが正

しいという議論がある。この点について、本書は詳細な議論を紹介しない。むしろ、二二節の「神の義」について、「神からの義」という所有や由来として属格を解釈することと、「義なる神」という神ご自身が義という本質を持つていることの二重の意味を明らかにしている。一方、一章一七節も気がなるところである。こちらは「神の義」は「人の義」とは次元が異なり、「排除する義ではなく、周囲の人々をもその中に招き入れてしまおうような義」（三〇頁）であると述べられていた。（なお、七六頁上段一七行目の「ディア・ピステオウス」は、新共同訳では、「信することにより」と訳しているはずで、再考を促している。）

また、私にとって関心のあるところの後者（ローマ書二三章）は、上からの権威について述べている箇所であり、ナチス政権を経験したドイツではどのように解釈されてきたのだろうか。かつて、宮田光雄氏の解釈に感銘を受けたことを想起した。本書は、まずドイツの黙想集からM・フィッシャーとW・シュ

ラーゲを取り上げる。前者は、キリスト者が国家に対する責任を疎かにしてはならず、「イデオロギーが…教会を迫害するならば、頭を上げることが肝要」と説き、後者はイエス・キリストの十字架ゆえに「公平な生活が保障されなければならず、人間の尊厳が守らねばならない」と説く。そして、リュティを経て、竹森満佐一の「神を拝むことを忘れれば、権威が自分を礼拝させようとする」「神の権威の確立を心がける」というところから、現代の日本におけるキリスト者の政治的倫理を考えさせられる。

最後に、ローマ書における「神の義」と「信仰」の解釈は、福音理解の大きな鍵であり、このように様々な箇所での多様な執筆者の考え方は、説教者の考えを深めるのに大いに役に立つもののだと言え、本書の出版に感謝したい。

（やなぎや・ともゆき）日本基督教団松本教会牧師  
（B5判・三九二頁・本体四五〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）



## 教会の政治 キリスト教会の礼拝

吉岡 繁  
Shigeru Yoshioka



教会の政治についての聖書の教理を概説する『教会の政治』、礼拝の聖書的根拠を問う『キリスト教会の礼拝』。聖書から演繹した教説を明確にし、改革派神学の中で教会政治と礼拝を位置づける。

A5判  
定価【本体2,400＋税】円  
ISBN978-4-86325-109-0

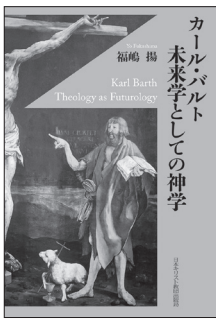


株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

未来の言葉の聴き方を教わるためのバルト案内

福嶋 揚著

### カール・バルト 未来学としての神学



佐々木 潤

序文に出てくるのは、二年前にわれわれを震撼させた相模原の施設の殺傷事件なのだが、その凄惨さ以上に不気味なのは、これが大きく根深いものから噴出したひとつの現象だということだ。重なるように、本書が発刊された夏、某議員の某月刊誌での記事が議論を巻き起こした。やはり「生産」という言葉を巡ってのことである。あれとこれを結ぶ線の存在が恐ろしいが、線どころか、いつのまにかすでに面となり、壁となって、行く手に立ちほだかり、われわれをその壁の中に塗りこめようとしている。国家の力・資本の力が心をなぎ倒してゆく未来なき谷間で、伝染する諦念と無気力が命を蝕む。

その二〇一八年。二〇世紀最大の神学者カール・バルトの死から五〇年がたった。福嶋氏は以前にも浩瀚なバルト論を世に問うたが、これは一般向けに書き下されたバルト案内書であり、神学入門であり、未来から来る「自由な愛」「愛への自由」の熱き提言の書である。同じ出版局から『すべての壁をぶっ壊せ！』と並んで放たれた本書は「未来は〈壁〉を越えて到来する」(第四章)と呼応している。

の特徴を切り出していき、あの時代と現代そして未来を結ぶひとつの線を見せてくれる。

若き日に教会員たちの労働問題で格闘する中でバルトが捉えたことを、福嶋氏は初期の未邦訳の文書も読みこなして編み込みつつ描き出す。のちの『教会教義学』『創造論』の中の「仕事論」にまで磨き上げられて展開するのを読み解くあたりが圧巻。説教に苦渋する牧師たちばかりでなく、会衆席にいる人たちをも励まし、いない人にも呼びかける、日付があり、顔が見える神学であることを浮かび上がらせる。

あのときそれを生む背景になったのと同じような問題が、形を変え、あるいはもつと手に負えない肥大化した姿で、われわれを覆っている。現にきょうも障害者雇用数の水増し問題などが報じられている。「いまバルトが生きていたら何と言うでしょうか」と本書は繰り返し問う。バルトはもういない。答えは懐古では与えられない。われわれがバルトに入門するのは、未

多くの工場労働者が住むザーフェンヴェイル村の教会に赴任した青年牧師バルトは、教会員でもある彼らの低賃金で働く苦境に直面した。彼らの側に立つ牧師のやり方に、経営側にいた教会員たちは抗議し、役員を辞任し、脱会までしてしまったというから穏やかでない。しかし労働者たちから「同志」と呼ばれた牧師は、戦争勃発と共に、それまで自分が拠って立っていた神学の崩壊を経験することになる。この「神学の死」からバルト神学は誕生した。聖書研究に没頭した彼はやがて「始めから始める」と説教し(一九一六年)、「聖書における新しき世界」を講演し(一九一七年)、出世作となる書物を執筆し始める。

「バルトが持つているキリスト教の原点への徹底的な追求、源泉へと深く掘り下げていく姿勢こそが——逆説的なことに——あたかも土台の底を突きぬけて外界に開けてゆく萌芽を秘めているのです」(一六二頁)。

『ローマ書』によってにわかには時の人となった彼は、神学部の教授となり、あのバルトになっていく。本書は、その全体の茫漠な概説とならないように、理解の手がかりになるいくつか

来の言葉の聴き方を教わるためにほかならない。半世紀前の人 がわれわれの肩越しに、われわれの前方の未来を指さしている。自由と愛を妨げるあらゆる障壁、キリスト教の内部にある壁、キリスト教と非キリスト教のあいだの壁、未来と現在をへだてる壁を越えてやって来るものを指さしている。

表紙には、バルトの机上にいつもあったグリューネヴァルトの祭壇画があらわれているのだが、十字架上のイエス・キリストを指さす洗礼者ヨハネのまっすぐ伸ばされたその指と、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」と背景に書き込まれたその言葉は、バルトの神学の姿勢であり、本書の主旋律でもある。「未来学としての神学」の呼びかけは、ヨハネの指となるべき人たちのうなだれた手が高く挙がるのを待っている。

(とさき・じゅん||日本基督教団武蔵野教会牧師)  
(四六判・二〇〇頁・本体一八〇〇円+税・日本キリスト教団出版局)

### 教会と国家、信仰と教育、女性と社会——生涯をかけて綴った初の論文集！

湊晶子著 (広島女学院院長・学長)

## 初代教会と現代

ASJ刊行  
五二六頁  
三、五〇〇円  
絶賛発売中！

日本における女子教育を力強く牽引してきた著者の学問の出発点となった、ローマ帝政下における初期キリスト教研究を第一部に集成。転じて、国際化時代におけるリベラル・アーツの大切さから、女性の自立と社会参画への道をキリスト教信仰の立場から追求した第二部、第三部構成の記念碑的著作。

## 黒川知文著 ユダヤ人の歴史と思想

中央学院大学教授・愛知教育大学学長兼教授

## ユダヤ人の歴史と思想

ヘレニズム期からナチスによるホロコーストに代表される現代まで、世界中で連続と行われてきたユダヤ人迫害。キリスト教世界の只中からなぜかとも奇烈な反ユダヤ主義が生じしえたのか。その歴史を真直ぐに見つめつつ、この災禍を通して形成されていったユダヤ人固有の諸思想までを詳説する。

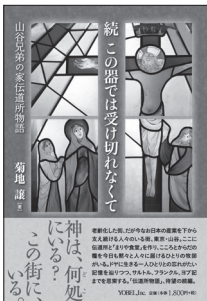
株式会社ヨベル YOBEL Inc.  
お問合せは info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1  
TEL03(3818)4851 (本体税別表示)  
\*自費出版の専門出版社\*資料・呈



菊地牧師を支援する会の会長になって三〇数年経過して……  
菊地 譲著

## 続 この器では受け切れなくて

山谷兄弟の家伝道所物語



鈴木正三

1 幼きイエスと馬小屋の馬のおしっこ

『続 この器では受け切れなくて』の書評を依頼された。ただ、この仕事はとて受け切れなかった。それは、数あるキリスト教会の消化機能は、食べ物と同じように、無意識に一定の限度を超えないレベルが保たれていたからだ。

ところが、この本はそのレベルを、様々な意味で超えてしまっている。そこで、この本に付き合って、実に付き合いにくい友人の本を読み砕いてみたいと考えた。その最初のテーマが「幼きイエスと馬小屋の馬のおしっこ」である。「だから、馬小屋でお生まれになったということ、多分ひどい環境の中でイエスが生まれたのだらうと想像できる。そこには蚊や蚤がたくさんいて、赤ん坊のイエスも刺されたのだらう。そばでは馬がおしっこをシャーシャーしていたことだらう。これは、時代の違いはあれ、山谷の南京虫の出来事とイエスの誕生の馬小屋とは全く同じ状況であることを意味する」。

2 菊地牧師のこれまでの歩み

くべき深みに引きずり込まれていく。しかし、彼によれば、それは神が自分を招いた必然の道だったという。「まりや食堂に三日も顔を出さないのでドヤに見行くと、体を九の字にして布団に潜り込んでいたが、部屋には尿の匂いが充満していた。飯が食えなくずっと寝ていたようで、もう四日になる。寝ていた時に失禁してしまっらしく、この状態に気がつかないとは急に痴呆になったようだ。……」

このような山谷の現実の積み重ねから、菊地牧師は、フランクルの『夜と霧』を通して、アウシュビッツの現実に出会い、それでも生きる、というフランクルの決意を学ぶのである。人生に何も期待できなくとも、命が続く限り生きようと決意していく。この本の中では、このような、人生の、成功や希望の中からではなく、絶望の中から学んでいく場面が繰り返し登場する。

4 山谷の対自存在（サルトル）としての、自分からの解放

それはなぜなのかは、例えば、サルトルの対自存在としての自分の発見から来るのではないか。とはいえ、サルトルの様々な書籍から、山谷の現実が浮び上がってくるような解釈を私は読んだことがない。「目から飛び込む花の赤色は私を押しつぶそうとしていた。真夜中に酔っ払いの戸を叩く「ビービー」という音は私を押しつぶそうとしていた。

このようにして、菊地牧師が展開するサルトルの対自存在を

菊地牧師の経歴は、一九七九年に山谷で日雇い労働者として働き始めたところから始まる。彼ははじめに日本基督教団山谷

伝道所の中森幾之進牧師のところ足場を作り、その伝道所から独立して山谷兄弟の家伝道所を設立し、やがてまりや食堂を作って、めしやの親父になった。その独立時代に、私は菊地さんと初めて出会った。そのため、私は菊地牧師を支援する会の会長となり、これで三十数年経ったことになる。

「山谷伝道について支援者から時折言われたのは、私が山谷で召命を受けて日雇いをしたり、食堂をつくるのはわかる。だが空手を習ったり、けがをして入院をしまで伝道するだらうかと質問された。それだけに、今回の本では、山谷における私の召命が私の人生の起死回生だったこと、私は山谷で神と出会ったことは特別だったことを述べなくてはならない」。

3 山谷に現実の深みとフランクルの『夜と霧』

かくしてそれからの菊地さんは山谷のまりや食堂の親父をや

意識させられるわれわれにとつては、たしかに自分を解放してくれる発見とでも言っていいかもしれない。

5 ヨブ記と対話

その後、菊地さんはヨブ記と、四十一章の最後まで対話していく。それがすさまじい。人間の存在を賭けて戦って敗れ、病に倒れたヨブの尊厳は、しかし、自分を徹底的に罵倒した友人たちのために、ヨブが祈ったことだった。ここを菊地さんは、贖いの信仰に尽きると言い切った。この自制は、しかしたいしたものだ。

(すずき・しょうぞう) 日本基督教団隠退教師

(四六判・三三八頁・本体一八〇〇円＋税・ヨベル)

アルノ・グリューン 村椿嘉信訳  
重版出来!  
四六判変型・二二〇頁  
八〇〇円＋税

### 従順という心の病

私たちがすでに従順になつていく  
私たちがすでに従順になつていく

工藤信夫氏評「従順」が良しとされる文化と、信仰の世界に再考を迫る、すぐれた洞察の書。

心の中の病

ヨベル YOBEL Inc.  
info@yobel.co.jp  
\*自費出版の専門出版社\*

カルヴァンに関心をもつすべての人々に益する書！

アジア・カルヴァン学会日本支部  
日本カルヴァン研究会学会誌

カルヴァン研究  
特集「ものとしるし」



関川泰寛

本書は、カルヴァン研究の専門誌ですが、「ものとしるし」という特集を組むことで、カルヴァンに関心をもつすべての人々を益する書物となっております。その意味で、本誌の創刊を心より喜ぶと同時に、今後もさらなる雑誌の充実を願ってやみません。

キリスト教関係の雑誌は、読者を得るといふ点からはどこも苦戦していると聞いていますが、いわばデパートのような雑誌ではなくて、専門店のような雑誌を新たに発行していくことは、キリスト教書の出版の可能性として、今後の方向性を示すものとなるでしょう。すでに、アジア・カルヴァン学会日本支部は、『命の登録台帳』『神への保証金』などカルヴァンのエッセンスの説教の翻訳出版、カルヴァン生誕五〇〇年の記念論集『新たな一歩を』などを出版して、活発な研究活動を共同して続けています。これらの共同研究の成果が、本誌に結実したと言えるでしょう。

さて、「ものとしるし」(res et signum)とは、アウグスティヌスによって用いられた概念ですが、その後、パスカル、想の長さや深さを諸論文によって示してくれま

「ものとしるし」の理解は、キリスト教神学のみならず、古代ギリシアの思想や古代教父の聖書解釈とも結びつくので、本誌の諸論文を読むところから、キリスト教思想史全体へと読者が関心を向けることが可能です。主題を入口として、カルヴァン神学のみならず、キリスト教思想全体を考察の対象とする雑誌として本書が読まれるならば、本誌は、続く2号、3号を心待ちにする読者を獲得することになるでしょう。

各シンポジウムには、野村信氏（東北学院大学教授、本会代表）による主題解題が付されています。さらに全体をまとめる野村講演が、最後に活字となっております。野村信教授は、「ものとしるし」という主題をめぐって、アウグスティヌスとカルヴァンの密接な関係と連続性を肯定しています。しかし、評者は必ずしもこの連続性を肯定的には見ていません。アウグスティヌスの二元的な思惟がカルヴァンにそのまま受け継

エラスムスなどによって、さらには宗教改革者カルヴァンにおいても、継承されました。特に聖餐における物素（パンとブドウ酒）とキリストの実在の関係を表すために、この概念が用いられた歴史があります。そのために、本誌には、加藤武「ものとしるし」——Augustine, De doctrina christiana における「久米あつみ」ものとしるし——カルヴァンの聖餐において「塩川徹也」パスカルにおける「ものとしるし」、久米博「ものとしるし」——現代記号論の視角からの考察、「金子晴勇」エラスムスにおける『ものとしるし』、鐸木道剛「8世紀イコン論における『ものとしるし』」そして野村信「カルヴァンにおける『ものとしるし』」岩田園「カルヴァンの『聖遺物考』について」が収められています。いずれもアジア・カルヴァン学会の二回にわたるシンポジウムでの発表を活字にしたものです。

収録論文の表題だけ見ても、本誌が扱う時代と領域の広がりや垣間見ることが出来ます。日本を代表する諸領域の専門家が、カルヴァンの「ものとしるし」理解に収斂されていく、神学思想でも多く読まれることを願っています。

(せきかわ・やすひろ＝東京神学大学教授、大森めぐみ教会教師)  
(A5判・二二八頁・本体一五〇〇円＋税・ヨベル)

岡山、赤穂線、西大寺……御国建設の槌音はここに響いて。

赤江弘之著 (日本同盟基督教団西大寺キリスト教会主任牧師)

聖書信仰に基づく教会形成

教会存亡の危機の中、与えられた一〇〇〇人教会の幻とその後の驚くべき成長。聖書を字義通りに解釈し、愚直なまでに聖書に忠実な教会づくりに心血を注いだ五〇年の牧師人生を通して語る「恵みの終活」。好評発売中！ヨベル新書049・二〇八頁・一〇〇〇円

山口勝政著 (JICA八郷キリスト教会牧師)

福音主義聖書論

あなたのみことばは真理です

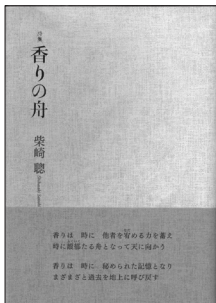
健全な聖書観なしに健全な教会形成なし。現代に聖書の「無償性」を力強く宣言する書。神学的妥協が教会の生命を奪う」との強い危機意識から「聖書は誤りのない神のことば」というキリスト教信仰の生命線を守りつつ、地方伝道に長く携わってきた「牧会者論考」。\*十号発売予定 四六判・二〇八頁・一三〇〇円

株式会社ヨベル YOBEL Inc.  
お問合せは info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1  
TEL03(3818)4851 (本体税別表示)  
\*自費出版の専門出版社\*資料・星

神の恩寵の中の香り

柴崎 聰著

詩集 香りの舟



中村不二夫

初めてキリスト教会の建物に入ったとき、それまでに経験したことのない荘厳な香りに体全体が包まれたのを覚えている。柴崎は二十一歳で、私は二十四歳の時に洗礼を受けている。柴崎の場合は分からないが、それまで私の家庭環境にクリスチャンは一人もおらず、この決断は人生最大にして究極の選択だったといってもよい。

それから半世紀、聖書によって育まれるキリスト教世界はあまりに深遠で、聖句のどれ一つとっても、凡庸な言葉で説明し切れるものではない。柴崎の作り上げる詩的世界は、最終的にイエスの膝元に行き着くのだろうが、八木重吉のようにはじめに結論ありきの帰納的な修辭手法をとらない。そうかといって、山村暮鳥のように神と血みどろの戦いをしたりせず、あるいは、柴崎はシベリア体験の石原吉郎研究者としての顔も持つが、そうした特異な体験を前面に押し出すものでもない。柴崎もその中心の一人となって立ちあげた、日本キリスト教詩人会初代会長安西均のような顕著な諧謔性もみられない。それでは、いったい、クリスチャン詩人柴崎の詩的世界をどういう位置づ

その具体的な実践者ということになる。知性という軸で聖書を読み進めていくと言語学者になつていき、別の面ではエモーションな超越的感情に支配され、詩人によっては神秘主義的傾向を帯びてくる場合もある。しかし、柴崎はあくまで日常の生活感情を逸脱せず、自らを悠然と言語の想像世界に遊ばせる。教会が多様な人材に彩られていくのは聖書の必然であつて、とくに柴崎が活動拠点とする日本キリスト教詩人会はカトリック、プロテスタントはもとより、無教会や非洗礼の詩人もいて、キリスト教をめぐって、それだけ解釈の幅がきわめて広くエキキュメンカルでとても風通しがよい。

柴崎は言葉の比喩を重視するが、香りはその中の最重要キーワードである。一般に香りといえは、聖書の「イサクの祈り」や「ナルドの香油」などが想定できるが、柴崎の場合、どうもそうした教団の説教に使われるような比喩ではないらしい。柴崎は詩人的な直観力で香りという比喩を選んでいて、それらを聖句のアレゴリーとして使用しているわけではない。きわめて、世俗的な生活感覚で森羅万象の香りを楽しんで受容しているようである。クリスチャンの座右には聖書があり、われわれが神の恩寵の中にあるのは必然だが、それをいかに咀嚼し、それをどのように生活の中に活かすかは各自自由である。柴崎の詩をみてみると、こうしたキリスト者の自由意志を有効に活用し、楽しんでいくようである。

詩集『香りの舟』は創造主がもたらす生活感情の歓喜が満

けでみていったらよいのか。私には神の恩寵の中にいて、たとえば空を飛ぶ鳥のように、主への感謝と賛美のうちに一日を過ごす、純粹無垢で素朴な抒情詩人のように思えてならない。そして、そこには日々クリスチャンとして自問自答し、艱難辛苦を乗り越えて今を生きている朴訥な人柄も感じられる。しかし、それら内的葛藤は、柴崎独特の多彩な比喩やアレゴリーの中に包まれて読者にはみえにくい。つまり、柴崎はクリスチャンとして「いかに日々を生きるか」の問いの過程で、ある種の救いとして、偶然香りという比喩に出会ったのではないか。いつどこでどのように出会ったか、ここで検証する時間的余裕がないのは残念であるが、かなり初期から香りという言葉に敏感であったはずである。少なくとも、詩集『涙半分』（二〇一二年・土曜美術社出版販売）によれば、「林檎」「生と死」「宥めの香り」など、新詩集につながる具体的表現が出てくる。

柴崎の著書『文学の比喩 聖書の比喩』（二〇〇九年・新教出版社）に詳しいが、聖書は比喩とアレゴリーでできている言葉の世界である。まさに「始めに言葉ありき」で、詩人柴崎は

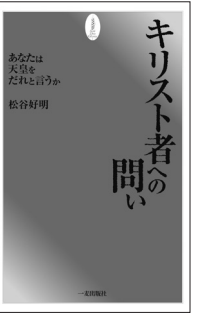
載である。タイトル・ポエムは冬至の日にゆず湯に入り、体をお湯に委ねていると、立ち上ってくるほのかな香りに包まれ、神から与えられた解放感に浸るという場面がモチーフである。だれもが温泉に浸かると一瞬にして体が浮遊し、無言で体が「極楽極楽」と発するが、それに似た感覚といつてよい。また、「香りの舟」は一方で「ノアの方舟」の疑似体験のようなものを示唆している。柴崎は『涙半分』という詩集で、すでに枝からもぎ取られた植物が、ほとんど死臭を放たず、むしろもぎ取られた瞬間から高貴な香りを放つと書いている。その「滅びの香り」（「生と死」・『涙半分』）という現象を、キリストの死と復活に置き換えてもよい。柴崎の言葉を借りれば、最後に運ばれる人の死体が放つ香りこそ、もつとも至高の姿として考えてよいのかもしれない。柴崎のいう比喩とは事柄の詳細な説明ではなく、「最後にやってくる死は／永遠の沈黙を強いてくるが／その時から心酔するほど過剰な対話が始まる」（「し」終連）とあるように、生と死の転換をもたらすことに核心部分がある。クリスチャンにとって死は、この世の務めを果たしたご褒美であつて、柴崎の論拠は比喩ではなく真実である。読者も柴崎の詩集を通し、自由に人生という香りを楽しんでもらえればうれしい。

（なかむら・ふじお 月刊詩誌「詩と思想」編集長）  
（A5判・八〇頁・本体一四〇〇円＋税・土曜美術社出版販売）

あなたがたはわたしを何者だというのか——この国におけるキリスト告白を問う

松谷好明著

### キリスト者への問い あなたは天皇をだれと言いか



富永憲司

かつて「神の子、キリスト＝救い主」として礼拝されたローマ皇帝がいました。その皇帝カイザルを称えて造られた町の一つ、フィリポ・カイサリアで、主イエスはお弟子たちに問われました。「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」（マタイ一六・一六）。その問いは、「あなたがたは、あのローマ皇帝とこのわたしのどちらを、まことの神の子、キリストと告白するのか」という、とてもチャレンジングで、かつ危険な問いでもありました。

キリスト告白は、抽象的な行為ではありません。「いま、ここで」、すなわち、わたしたちが具体的に生活しているその時、その場の政治的、社会的状況下において、否応なく利害関係を共にする人々との様々な結びつきの中で、なおイエスをすべてに優る主であり、「生ける神の子、キリスト」と告白していくことです。したがって、その告白的行為は、しばしば時の政治や社会的安定を揺るがし、文化や慣習と衝突し、共に生きる人々との平和をも損なっていくような、厳しい戦いを伴うものとなります。

著者の松谷好明先生は、牧師、教育者、また篤学なビュロータニズム研究者として長年教会に仕えてこられました。若き日から日本の教会やキリスト者のアレクシス臆ともいべき弱点を自覚しておられました。それは、この国が近代国家として出発するにあたって国民統合のために宗教的・政治的な基軸として採用した「日本国の大祭司としての天皇」という問題です。この本は、著者が長年この「天皇問題」と取り組む中で、折々になされた以下の四つの講演がまとめられたものです。

第一講演 「キリスト者にとって天皇とは」

第二講演 「天皇はキリスト教徒となりうるか」

第三講演 「近代日本におけるカトリック教会と天皇制」

第四講演 「四代の天皇・皇后とキリスト教」

第一と第二講演には、「日本宣教論の文脈において」「日本宣教の観点から見た天皇」という副題がつけられています。著者は、単に天皇制を学術的に論じるのではなく（といっても、著者のこの分野に関する膨大な知識量には驚きます）、あくまでも日本宣教やキリスト教信仰の課題としての天皇制を取り上げ、

現在と将来の教会やキリスト者の告白的あり方を問うています。

さて、今年には近代日本国家が誕生して百五十周年記念の年です。それはプロテスタントによる日本宣教の歴史とも重なり、西欧諸国家に追いつき追い越すことをめざした後発国日本と、そこに生まれたよちよち歩きの教会の関係が考えさせられます。近代ナショナリズムと結びついた国民国家形成と足並みを揃えて歩み始めた日本プロテスタント・キリスト教は、たとえば、スコットランド長老教会の国家から霊的に独立した大人の関係に比べると、国家や天皇からどうしても自立できない日本人独特の何かを今も残し続けているようにも思えます。

講演の中には、歴代の日本の著名な神学者や牧師たちの天皇に対する態度や言説なども辿られています。また、現在のメイソライン教会一般のスタンスを「自虐史観」と言い放つ「日本を愛するキリスト者の会」、その他についてもふれられています。しかも、それらの方々の共通の問題点として、一、偶像との戦いに満ちた旧約聖書の軽視、二、教会と国家の関係史や教

理の学びの不足、そして何より、三、天皇制を正しく理解しようとする理性的究明心の欠如、との指摘には聞くべきものがあります。それは、国家や天皇のことになると神学的であるより情動に流れやすい日本人キリスト者の問題であり、自分はどうかと本を読む途中で考え込まずにおれなくなります（第一、二講演）。さらに、この講演集には、「皇室神道」の歴史や宮中における天皇の宗教行事などもわかりやすくまとめられています（第二講演）、またカトリック教会の天皇制へのスタンス（第三講演、逆に、天皇家のキリスト教への関わり（第四講演）など、あまり知られることのないエピソードも紹介されています。来年に控えた天皇の代替わりのタイミングに、この国におけるキリスト告白について深く問いかけるこの講演集を、お薦めいたします。

（とみなが・けんじ）日本キリスト教会柏木教会教師

（四六変型判・一九四頁・本体一七〇〇円＋税・一麦出版社）

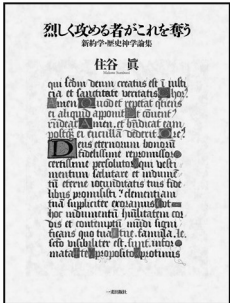


## 烈しく攻める者がこれを奪う

新約学・歴史神学論集

住谷眞

Makoto Sumitani



神学と文献学の間を  
往還しつつ、  
crux interpretum  
(解釈者の難所)  
に取り組んできた  
渾身の論文集。

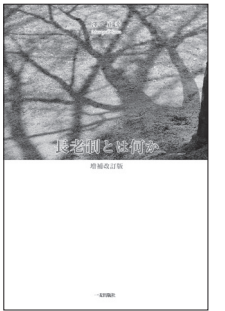
A5判・上製・函入  
定価【本体5,400＋税】円  
ISBN978-4-86325-063-5



株式会社 一麦出版社  
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

長老制の神学的基礎的基盤の究明に取り組む  
澤 正幸著

長老制とは何か  
増補改訂版



深谷松男

本書は、かつて日本キリスト教会大森教会のいわゆる大森講座の一冊として刊行された同名の書の増補改訂版である。筆者は、その旧版により鮮やかな啓発を受けたことを懐かしく想起しつつ、今回改めて読み直してより確かな教示を受けた。格別の感慨を覚えつつ、本書が広く読まれるようにと願っている。

まず第一に、本書執筆の著者の意図ないし視点に注目された。著者は、日本における福音宣教と主の教会の形成については希望を確かにして長老制に徹することが肝要であり、そのためには、歴史的研究や長老制教会の規則の分析等もあるが、長老制の神学的基盤の研究が不可欠であるとして、本書においてそれに取り組んでいる。すなわち、「研究の素材は宗教改革者、特にカルヴァンの聖書註解、『キリスト教綱要』、またカルヴァンの神学の流れにたつ『フランス信仰告白』『ベルギー信仰告白』の中の長老制に関する項目である。これらのテキストの学びをとおして、長老制についての原理的、基礎的考察」(一二三頁)を進めたのが本書である。

著者によると、長老制は長老職という務めを立てることと長

老の会議をもって教会政治を行うことを原則とするものであるが、カルヴァンの『綱要』にも改革期の信仰告白にも長老制なる表現はまだ出ていないで、「主がみことばにおいて教えられた霊的統治方式ないし霊的秩序」とは何かを問うしかたで長老制の聖書の神学的根柢が明確にされているとして、それをスベイカー等多くの先人の研究を参酌しつつ展開する。

すなわち、「第二章 長老制の聖書の根柢」および「第三章 霊的統治方式としての長老制」において、エフェソ四・一一の改革者の釈義の紹介から始めて、教会はみことばの説教によって治められるべきであること、このことは主キリストの定めによること、また説教に仕える牧師は主によって立てられることを明らかにし、牧師と共に教会を治め戒規執行など信徒の訓練をする務めの長老と「仕える務め」の執事について聖書の根柢を述べ、これらの根本は、キリストご自身がみことばと御霊において教会に現臨し支配されるという秩序であり、母なる教会における救いに関わる秩序であることを明らかにする。

特に、カルヴァンが、長老につき、みことばに仕える牧師す

なわち宣教長老と「治める務め」に当たる治会長老との二種類の長老を考えていたこと、そしてその両者の関係をどのように考えていたかを論じる箇所(五〇―五四頁)は熟読に値する。

重要なことは、二種の長老の務めは相携えて一つの働きをする共働関係にあることである。すなわち「牧師が説教し、長老が牧師とともに訓戒することをおして、教会はみことばに聴きかつ服従し、また反逆する者が諫められ押し止どめられることによって、みことばの支配が貫かれてゆく」(『綱要』第四篇十二章)とカルヴァンは説いており、「現在の教会の長老制にとって緊急的課題は、まず第一にこの共働関係が築かれることではないだろうか」と、著者は語りかける。

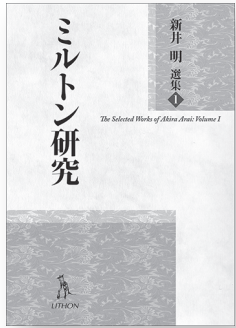
本書はさらに、「教会の会議」「長老制の帰結としての教会の国家からの自律」を論じ、「補章 教会と国家 神の霊的統治と政治的統治」において、長老制により神の霊的統治に服する教会は、同時に国家の官憲の務めが神の戒めに服することにあ

ることを教え続ける榮譽ある務めにも仕えるものであることを説く。聴きかつ共に踏まえるべき貴重な説示である。

本書は平易な表現で、改革派教会の信仰告白ないし神学的基盤をしっかりと踏まえて丁寧に論旨を展開するもので、長老制の今後の研究や実践の原点を明示し続ける貴重な著作である。

教会法の視角から長老制を考察してきた筆者には特に学ぶところが大きかった。なお、教会の上記の務めをキリストの三職(預言者、王、祭司)に当てはめて説く見解があるが、筆者は基本的に疑問視している。「カルヴァンはキリストの三職を論じたが、それによって教会のつとめを基礎づけたり、教会の三つのつとめをキリストの三職と関連づけたりすることをまったくしなかった。そのような考え方はカイパーに始まるもの指摘(四八頁)には大変興味を覚えた。付記しておく。

(ふかや・まつお)金沢大学名誉教授、宮城学院元院長  
(四六判・一〇八頁・本体二二〇〇円+税・一麦出版社)



新井明選集[全三巻]  
第一巻  
ミルトン研究

新井 明 著

日本女子大学名誉教授/  
今井館教友会前理事長

●A5判上製 435頁  
本体5,000円+税

イギリス17世紀の詩人ミルトンは宗教と文芸に身を挺した人物であり、日本の近代化の過程に、すくなく影響をとどめた。日本を代表するミルトン研究者としての著者が発表した論考を中心に編まれている。

第二巻と第三巻には、無教会を中心とした人物論、講演、聖書講義、などが収められる予定。

ISBN978-4-86376-066-0

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

近年の研究を取り巻く問題状況ふまえた学びの書

土井健司 監修  
土井健司、久松英二、村上みか、芦名定道、落合建仁 著

## 1冊でわかるキリスト教史 古代から現代まで



阿部善彦

中学の頃『歴史入門』（神山四郎著・講談社現代新書）を読んで、歴史とは暗記するものではなく、資料を基に自分で書くものだとして興味を持った。その後『正統と異端』（堀米庸三著・中公新書）や神山四郎訳『教会史』（ロルツ著・ドンボスコ社）を見つけたキリスト教史（特に西洋中世）に関心を持つが、高三の頃アウグスティヌスを読んで、歴史から「時間」に興味に移り、上智の哲学科に進学した。そうした遍歴もあって個人的にはキリスト教史がいつも気になっていた。

キリスト教史をどう書くのか。これは言い尽くせぬ大問題だろう。昨年、佐藤優・解説付きで三千数年ぶりに復刊となる『キリスト教史』（藤代泰三著・講談社学術文庫）が出た。七百頁超の大部だが「序論」は「私の立場」と題して「歴史とはどのようなものであるか」という歴史そのものへの問いで始まり、その後にはキリスト教史を分析し記述する視点・方法への省察が続く。だが近年では各国別に固定化された従来の歴史記述や、方法的に確立された特定の観点・手法による通史記述の限界が批判的に検討され、かわりに「グローバル・ヒストリ

」といった諸地域を貫く根本的な歴史事象を複数の専門領域・専門家によって複眼的・重層的に記述する手法が重視されている。

ここに紹介する『1冊でわかるキリスト教史』も「歴史というものは、個々の歴史的事実と歴史全体の流れから成り立ちますが、近年の通史では全体の流れについては明確化しない傾向が見られます。同様にキリスト教の歴史全体をどのように評価するのは、今日かなりむずかしい問題です」「近年の教派間対話の傾向も背景にしつつ、本書では歴史全体の流れは曖昧のままに残し、開かれたままにしました」と平易な言葉で述べている。これは入門書なのでややこしい問題を端折ったなどという弁解ではなく、近年のキリスト教史研究を取り巻く問題状況への深い理解と洞察から本書が生まれたことを証している。

であるから、なおさら本書における古代、中世、近世、近現代、日本の五部からなる構成も、けつしてありきたりて形ばかりのものではなく、新鮮な意義づけを伴っており、とても説得力がある。

執筆陣（古代から順に土井健司、久松英二、村上みか、芦名定道、落合建仁の五名）は言うまでもなく各専門領域での第一人者であり、それぞれがキリスト教史をどのように記述しているかと想像するだけで本書を読みたくなるだろう（実際三月刊行後、翌四月には重版）。浅学の評者にはキリスト教二千年の歴史に関する本書の内容に全体的また個別的に立ち入って紹介する力がなく、皮相的言葉を連ねざるを得ないのが残念である。教員としては教科書としての効用をどう考えてしまうが、高校世界史が必修でなくなる時世にあつて本書に期待される役割は大きい。「創造」「終末」とあるようにキリスト教は本質的に歴史的宗教とも言え、キリスト教理解のためには歴史性また歴史上の諸展開についての基本的知識が不可欠である。そこで本書は高校・世界史の事項との滑らかな接続の上にさらなる学びの発展を可能とするだろう。よく整理された小見出し、適切に配置された図表・地図・データ・年表・参考文献、なるほどと

興味を引くコラム。いずれも授業時に学生に紹介したいとまず思い浮かぶものがピタツとはまる（個人的には末尾のニカイア信条・使徒信条がありがたい）。資料集としても便利なので中高の宗教・聖書科の生徒必携書としても継続的に利用できよう。私の専門とするエックハルトには二回も言及されていて嬉しい。その記述は先行するエックハルト研究に基づいている。但し、最近の研究では、異端者として断罪された、教会制度（秘跡）を否定した、トマス思想とは相容れない、神秘主義、などの、以前より繰り返された評価はもはや歴史的にも思想的にも不正確とされている。こうした最近の研究動向の周知・紹介の責任はひとえに今のエックハルト研究者にあるので付記した。

（あべ・よしひこ 立教大学文学部キリスト教学科准教授）  
（A5判・二四八頁・本体三二〇〇円＋税 日本キリスト教出版局）



## 新刊 聖書学論集49

日本聖書学研究所編  
●A5判並製 定価3000円＋税

エリフの発言における  
シャハト表現の考察  
藤方 玲衣

●  
テル・レヘシュ シナゴーク  
—後1世紀のガリラヤにおける  
シナゴークの事例  
山野 貴彦

●  
ゲラサのレギオン  
—マルコ福音書5章1-20節の  
伝承史的・社会史的分析和考察  
大川 大地

●  
初期ユダヤ教における独身  
—エッセネ派／クムラン宗団  
およびテラペウタイを中心に  
千ヶ崎 祥平

●  
地中海地域における  
初期キリスト教徒たちの  
超域的なネットワーク  
ペーター・ランベ（山吉 裕子 訳）

## 現代ヘブライ語 における 前置詞の重要性

ヘブライ語の歴史と  
発展に関する一考察  
アダ タガー・コヘン 著  
同志社大学神学部神学研究科教授  
●A5判並製 本体3,500円＋税

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402  
☎03-3238-7678 FAX03-3238-7638

「目に見えるものと見えないもの」

吉田 実著

## 絵画と御言葉

### 美術作品に表されたキリスト教信仰



町田俊之

この本を手にとり取って見る。ハードカバーでもとても重厚感があり、「フェルメールの青」と言われるアピスラズリ（鉱物）の色を基調としたカバーには、フェルメールの描いた窓辺で手紙を読む婦人の姿が表紙を飾っていて、見る者を静かに包み込んでくれる。ここには、目に見えない世界（書かれている内容）と目に見える世界（本の装丁）とのつながりがあり、著者の思いが伝わってくる。

著者の吉田実氏は、神戸に生まれ、京都の美術大学にて洋画を学ばれ、十一年ほど中学校の美術教師を勤められた後、献身の志とともに神戸の神学校を卒業され、その後は日本キリスト改革派神戸長田教会の牧師として務められておられる。

この本には、ご自身の美術創作からくる経験と、画家の生涯に対する強い関心、そして、牧師としての御言葉に対する真摯な思いと、それを読者に語ろうとする情熱とが一体となっており、迫ってくるのである。

美術作品に表されたキリスト教信仰として取り上げられた作品数が五十八枚（彫刻も含む）。時代的には中世末時代のジヨ

誌が出版されてきた。現在は下火になったものの、ルネサンス美術、バロック美術においては今も高い人気を博している。

そのような多くの書物の中で、本書の特徴は、絵画を御言葉をもって理解し、解釈し、翻訳（絵からの言葉に）していることである。キリスト教美術の本来の鑑賞の仕方を提示しているのである。

特に、これまで発行された本の中で、あまり取り上げられてこなかったルネサンス時代の彫刻（リーメンシユナイダー、ミケランジェロ）、近代以降の絵画（ミレイ、ゴッホ、ルオー）、ロシアの絵画（イワン・クラムスコイ、イリヤ・レーピン）、現代の作家（コルヴィッツ、バルラハ）、そして現代の日本人画家（堀江優）の作品群は必見であり、また必読である。

これらの作品の選択とその解説は、著者の鋭い聖書の視点、そして現代的視点、それから信仰的視点の深さと広がりを示しているものであり、目に見えるものとおして見えないものを示そうとしている美術の大きな役割を認識させられるものである。

主イエスは、「空の鳥を見なさい」と人々に語られた。それは目に見える鳥をとおして、目に見えない神の国の平安、豊かさを伝えようとしたのであった。また、主イエスは、多くのたとえ話をもって神の国について語られた。そのたとえ話を民衆や弟子たちは、日常の目に浮かぶ事柄として聞くことができ

ットの作品（二二〇五年頃）から、ご自身の作品（二〇〇八年）に至るまでを年代順に網羅している。

それぞれの作品には、細かなところまでじっくりと眺めた上での的確な解説がある。パッと見ただけでは見落としてしまいがちな部分、またその絵の主題がどこにあるのかを見定めていく視点など、教えていただかなければ気がつかないものが随所に記されている。

その解説の中には、著者自身は美術史研究はまったくの素人と言われているが、画家たちの生涯について、書店に置かれている美術書以上に、深い学びをさせていただいた。

そのような土台となるさまざまな事柄の上に、この本の目的である作品のテーマに基づく聖書の御言葉からのメッセージが語られているのである。その内容は、目に見える絵という具体的なものとおしてであるので、説得力をもって読者に訴えている。

十五年ほど前だろうか。一般の出版社でもキリスト教美術の解説書が取り上げられ、それがブームとなっていくつもの雑

聖書は真に視覚の世界に満ちた書物ではないだろうか。目に見えない神は、実に目に見える宇宙、大自然、人間たちを造られた、神のひとり子イエスは、もともと目に見えないお方でありながら、目に見える肉体を持たれ、そのまま十字架につけられ、墓に葬られ、見えるかたちで復活された。そのお方が、人々の見ている中で天に昇られ、再びこの地に再臨されるのである。

宗教改革時代以降、視覚的なものに重きを置かなくなったプロテスタント教会が、聖書が示している視覚的世界にもっと関心が示されることを願うとともに、聖書の言葉の理解に正しい導き手が必要なように、キリスト教美術の理解にも正しい導き手が必要なことを私たちに示しているのが本書ではないだろうか。

（A5判・一九〇頁・本体三二〇〇円＋税・一麦出版社）  
（まちだ・としゆき）バイブル・アンド・アートミニストリーズ代表、富士見聖書教会牧師、青山学院大学非常勤講師（宗教学、キリスト教美術）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用			02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1701F	022-223-2736	共用		fqcwks24@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	〒新中延町2-2 榎ヶ丘センタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	00160-2-18410
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-9230	03-6418-5231	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.jp/~yohatara.cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunshita.coocan.jp/	nagoya-seibunshita@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曾根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびぶるすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用		kobe-kirisyo@mse.biglobe.ne.jp	01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/masujama_1007/mexim	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用		kbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖繩キリスト教書店	903-0207	中瀬読道館字翁原777 沖縄キリスト教館内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-4-1283

※ 一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

## ■新教出版社

詩篇の思想と信仰 VI 第126篇から  
第150篇まで

月本昭男著

「福音と世界」に18年の長きにわたり連載された詩篇注解。古代オリエント学に通暁する著者ならではの広い視野から、各篇に詳細な語釈を施し、詩篇詩人の思想・信仰の特質に鋭く踏み込む。なお第V巻（第121篇から第125篇）は来年刊行予定。

四六判・予価3400円

## ■日本キリスト教団出版局

V T J 旧約聖書注解

出エジプト記 19〜40章

鈴木佳秀著

「あなたと共にあろうとする」との意志を成就させるしとしとして、イスラエルの民に律法（トーラー）を与える神ヤハウェ。祭儀や掟は束縛ではなく、神とわれわれが親密な関係へ入ることへのいざないであることが、精緻な考察によってふたたび説き明かされる。

A5判・上製・334頁・本体4400円

《シリーズ刊行開始記念》特価3800円 \*2019年3月31日まで

マンガ絵本 聖書ものがたり ノアの箱舟

金斗鉉／具本曙／金徳造作

ノアは神さまに命じられて、大きな箱舟をつくり、家族とたくさん動物をのせます。やがて雨が降りはじめ、大洪水となって……。『信徒の友』の教会スレッチャ、『聖書人物おもしろ図鑑』

## INFORMATION

### 近刊情報

のイラストでおなじみの金斗鉉氏が、ポップなスタイルで描くマンガ聖書絵本。  
A4判・上製・26頁・本体1200円

## ■教文館

始まりのことは

——聖書と共に歩む日々366

片柳弘史著

新しい一日を始めるための黙想の言葉を集めた「一日一章」。信仰の有無を問わず聖句に親しめる一冊。クリスマスプレゼントにも最適！  
文庫判、400頁、本体900円

キリシタン研究第50輯

きりしたん受容史

——教えと信仰と実践の諸相

東馬場郁生著

キリシタン信仰の多様な表現を、16世紀に新しい宗教としてのキリスト教を受容した日本人信徒たちの視点から捉え「受け手中心」のキリシタン史の再構築を試みる。

A5判、320頁、本体5900円

古代ギリシア教父の霊性

——東方キリスト教修道制と神秘思想の成立

久松英二著

キリスト教霊性の全体像を理解するために、その核心部分が成立した古代東方キリスト教の霊性を掘り下げて探究する一冊。

A5判、320頁、本体3800円



# 福音と世界

## 2018年11月号

特集〈場〉としての教会

寄稿者 渡邊太、有住航、中村吉基

松浦千恵、取材・東京平和教会

小特集Ⅱ日本とパレスチナのいま 連帯の歴史と現在をめぐって（白桦陽、パレスチナ民衆との新たな連帯のために）（釜城美幸）／好評連載 福音の地下水脈（ケロッピー前出）聖書とわたし（鹿島田真希）、わたしはロックがわからない（山口政隆）、地のいと低きところにホサナ（ブレイディみかこ）ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

### 編集室から

「ここから富士山が見えますよ」

下をむいて歩いていたら誰かから話しかけられた。落ち込んでいたように見えたのだろうか。

梅雨明け間もない頃、先週行ったキリスト教美術展のことを考えながら歩いていた。仕事で大変お世話になった方の絵が展示されると聞いていたので、ぜひ、拝見したいと思って向かったときのことだ。

生前には適えられなかった初めての美術展出展。

ご本人曰く、仕事の依頼がどんどん舞い込んできたから売り込む必要がなかったらしいが、自慢げに語る言葉の裏に、美術展開催への憧憬が隠されていたように思う。出展作品のサイズは額に入れても他と比べると小さいのだが、そんなプライドを反映するように大きく見え、見劣りすることはなかった。

遺品となった作品整理に立ち会ったとき、イエス・キリストのスケッチを見つけ、その枚数の多さに驚かされた。道路脇の僅かな土で遅く生きる草花を愛おしまれた方。話しかけられたときは丁度お好きだった草花を探していたときだった。

顔を上げると、いかにも人の良さそうな老人が橋の中央を少し降った辺りからこちらを見ていた。一瞬躊躇したが、日曜日の教会からの帰り道、一週間の中で一番心が穏やかな時間だったこともあり促されるままに動く。

隣接する建物と木々の隙間から薄すすら、僅かに頂上が見えた。立ち位置が少しでも変わると見えなくなる。障害物を掻き分け見定めようとしますが、コンクリートの隙間から芽を出す草花と似ているような気がしておかしかった。

「東京でも天気が良いと見えるんだよ」

老人の得意げな言葉通り、その後、見ようとするときはいつも雲に遮られていた。次にお目見えできたのは晩夏の夕暮れ。

山の向こう側に広がる神秘の風景を、覚えておきたいと思うた。(吉崎)

### 本のひろば 2018年12月号 予告

本・批評と紹介…堀川敏寛著『聖書翻訳者ブーバー』、朝岡勝大嶋重徳著『教えてバスターズ!!』、左近 豊著『エレミヤ書を読もう』、イェルク・ツィンク著『わたしはよろこんで歳をとりたい』、工藤信夫著『暴力と人間』他

# わたしの信仰

## キリスト者として行動する

10月25日

アンゲラ・メルケル著／松永美穂訳

原発離脱や難民受け入れなどの政治決断の根底には何かがあるのか？ 教会関係の集会などで語った講演や聖書研究など16編を収録。彼女の信仰観・社会観・人生観を余すことなく伝える注目の書。

◆四六判・本体2300円



# 剣を収めよ 創造的非暴力と福音

ジョン・デア著／志村真訳

イエスの非暴力への呼びかけに従おうとした多くの福音の証人たち。創意工夫に満ちた非暴力的平和創造の可能性を追求する。

◆四六判・本体1800円

# ルターはヒトラーの先駆者だったか

宮田光雄著 宗教改革論集

ホロコーストの惨禍にルターは責任があるのか？ 予定説の真の意味とは？ 宗教改革期の芸術家たちの信仰理解は？ 宗教改革の遺産を探る。

◆四六判・本体2750円

# イエスのたとえ話の再発見

ヨアヒム・エレミアス著／南條俊二訳

「たとえ」の本来の意味に迫った金字塔的名著の新訳。

◆四六判・本体3000円



2019年 渡辺禎雄版画カレンダー「よぎ羊飼い」発売間近 ◆本体500円

## 2018年いち押し of クリスマス絵本!

ヴァン・ダイク作／中井俊巳文／おむらまりこ絵

◆A4変型判・1400円

# もうひとりのはかせ

「アルタバン物語」としてクリスマス劇でおなじみの名作、  
待望の絵本になりました!

救い主に捧げるために、自分の全財産を売って宝石を用意したアルタバン。でも3人の博士たちに遅れてしまった彼は、ひとり救い主を尋ね求めて、33年間も放浪の旅を……。



本のつらば 第七三〇号 二〇一八年十月号

発行所 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話〇三三六〇一五六七  
振替〇〇七〇一五二六七九  
印刷所 (株)平河工業社  
電話〇三三六〇一五六七

定価七八円(税抜七二円)千62円  
一年分三〇〇円(送料共)

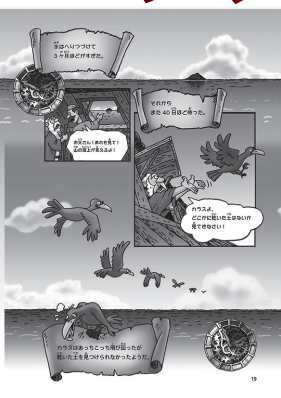
日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457  
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ http://bp-uccj.jp <価格8%税込>



マンガ 聖書  
絵本 ものがたり

# ノアの箱舟

金斗鉦 / 真本曙 / 金徳造 作



2018年10月5日刊行

『信徒の友』教会スケッチなどでおなじみの金斗鉦氏が、新たなスタイルで聖書の壮大なストーリーを描きおろす。マンガ感覚で楽しめるノアのおはなし。

◆A4判 上製・26頁・1,296円

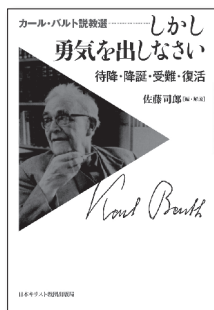
カール・バルト召天50年を記念して刊行

カール・バルト説教選

## しかし勇気を出しなさい

待降・降誕・受難・復活

佐藤司郎 編・解説



2018年10月25日刊行予定

◆四六判並製・248頁・2,592円  
20世紀を代表する神学者カール・バルトは、名説教者でもあった。彼のクリスマス期・イースター期の説教を精選し、各編に解説を付す。

日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ最新刊

VTJ 旧約聖書注解

## 出エジプト記 19~40章

鈴木佳秀

シリーズ刊行  
開始記念

特価4,104円

2019年3月31日まで

◆A5判上製・334頁・通常価格4,752円  
臨在の意志を成就させる印として律法を与える神ヤハウェ。祭儀や掟は神とわれわれが親密な関係へ入ることへの誘いであることを説き明かす。



2018年10月4日刊行